

ホフディラン企画『ワタナベイビー生誕50周年記念ライブ ～史上初!50歳のベイベー誕生～』2018.10.17(水) 浅草公会堂

さあ!浅草公会堂のバースデー・ライブまで1週間を切りました。ゲストも超豪華!チケットもソールドアウト目前!ここまで来たら、みんなの力で本物のソールド・アウトを勝ち取りましょうよ!ウソ偽りない、本当のソールドアウトをね!イベントを盛り上げるべく、私の半生を綴る予定であったこのワタナベ新聞も、一応今回で最終回!いかがだったでしょうか?この新聞を読んだ人は、とりあえずチケットを買きましょう!最後まで読んでたらチケット売り切れちゃうかも知れないしね。さあ、まずはチケット購入ページの画面の購入ボタンをクリックしたら、本文に入りましょう。26歳、初めてバンドを持ったワタナベ青年。楽しくも葛藤の日々は今日も続いているようです～



ホフディランとして月2回の下北沢クラブ・スリッパ出演を重ね、少しずつ固定客も増え始めたある時期、ナチュラル・ファウンデーションという新興レーベルより、かせきさいだあ三のファースト・アルバムが制作、リリースされることが決定した。この事により、ホフディランのメンバー構成も大きく変動し、スタイルを徐々に変えながら活動を続けていく事となる。かせき氏のソロ活動専念に伴い、あの強力なバックコーラス & ダンス隊を失うのは大きな痛手であったが、またしてもホフディランに幸運の女神が微笑む。

なんと、この時期のホフディランに突然、真心ブラザーズの倉持陽一氏(のちのYO-KING氏)が加入したのだ!出会いのいきさつも加入のきっかけも誰もはっきりとは覚えていないのだが、ある日突然、リードギターに倉持氏が加わった。



倉持氏が籍時のホフディラン

あまりに自然に参加していたので当時は実感がなかったのだが、ただの素人バンドにとっては、あまりにも大きな戦力である。そして、倉持氏側には何のメリットもない。「楽しいからやっているんだ!」という、理想的かつ自由な倉持氏の態度・

姿勢は、その後のホフディランに多大な影響を与える事となる。

アルバム『KING OF ROCK』や『拝啓ジョン・レノン』『サマーヌード』等の大ヒット曲を連発する前夜であったが、すでにスポーツニュースで毎晩流れていた『どかーん』や、『モルツ』のCM曲などで、全国的知名度のあるプロのスターがなぜか突然ホフディランに加入した。

同時期に、初めて人間のサポート・ドラマー(フジモトサン)も加わり、楽器をエレキギターに持ち替え、『謎のフォークバンド風』という風情から、また違った独特な風貌へと変化していく。エレキギター化され、ドラムとリードギタリストまで加わっても、いわゆるロックバンド感はまだでなし。『ポップバンド』というキラキラしたテイストとも全然違う。コミックバンド風でもない。やっぱり「変なバンド」としか言いようのない第二期ホフディランであった。

まだ結成から1年未満にもかかわらず、プロのバンドに混じって学園祭やイベントにも出演するようになり、結構忙しい素人バンドとなる。立教大学の学園祭では、サニーデイ・サービス、ヒックスピル、かせきさいだあ三との4バンド対決。実行委員の学生さんたちに敬語でちやほやされて、まるでプロ気分であった。

ON AIR WEST(現在のO-West)でのイベントでは「UAという新人歌手をゲスト出演させてくれないか」という相談を受け、やや上から目線的に「ステージ衣装で学ランを着てくれるならいいですよ」などと条件をつけた事もあった。学ラン姿で歌うUAとYO-KINGが同じステージにいるアマチュア・バンドという、1年後には考えられないようなメンバー構成での出演であった。その日にUAが歌ったホフディランのレパートリーが『電話をするよ』。翌年、大ヒット曲『情熱』のカップリング曲としてリリースされることとなる。

ソウルセットのファンからスチャダラファン、そして真心ファンもホフディランのライブを見に来てくれるようになり、雑誌にチラホラと名前が出始めたのもこの頃。徐々にではあるが、音楽好きの人たちの間でホフディランという名前が知られるようになる。同時に水面下では、レコード会社、所属事務所という体制も整いつつあった。ただただ幸運に次ぐ幸運で、周りは固まった。マネージャー木村、ディレクター野村、アーティスト担当吉村のチーム・ホフディランが集結した。

まだ学生だった小宮山が、きちんとした就職活動をしていた形跡がないことを考えると、早いうちからプロダクションやレコード会社との接触が本格化していた可能性もあるが、この辺も記憶が曖昧である。とにかく、ちょうど良い節目として、小宮山の大学卒業のタイミングである新年度96年の4月1日をもって所属事務所=アロハ・プロダクションズ、レコード会社=ポニー・キャニオンとのダブル契約に合意した。あとは商社マン・ワタナベ問題である。

父親のコネで6月ごろに入社、やっとなれてきた矢先の電撃退社である。バカ息子、ここに極めたり!と言ったところであるが、例によって父にも会社にもなかなか言い出せず、無駄にモヤモヤした数週間を過ごす。

しかしながら、「親の死に目にも会えぬ」と言われる芸能界。「4月からの契約だから4月から仕事を始めればいい」なんてノンビリした考えが通用すはずもなく「4月デビューのために今から撤回しを始めますよ!」という意味での4月契約合意である。携帯電話も普及していない時代、自宅にも会社にもガンガン芸能関係の電話が入りまくることとなる。鉄鋼を取り扱う企業のデスクに、「ポニー・キャニオン」「アロハ・プロダクションズ」はもちろんのこと、「フジテレビ」「ニッポン放送」、時には「フェアチャイルドのYOU」と申しますが、なんて電話も入るようになる(YOUさんのアルバムで作詞を共同していた時期だった)。いよいよ女性社員たちを中心に「慎さん、何か匂うわね」という噂が流れるようになり、ついに白状することに…。



youさんインストアライブ

丸紅の皆さんには本当にご迷惑をおかけした。いまだかつて「メジャー・デビューが決まったため」なんて理由での退社例がなかったため、会社側としても相当な驚きはあったようであるが、結果的には全員から祝福していただき、「やりたいことをドンとやれ!」という社長の暖かいお言葉まで頂いた。ただ、全員が心配してくれていたのがワタナベ家の父と子の関係である。社長にまで退社の意向とその理由を説明したにも関わらず、自宅で父に打ち明けられない数日間、。長男失格である。

そして、その一報は鉄鋼業会を駆け巡り、外部から父の耳に入ることとなる。
子「お父さん、実は、」
父「もう知らん、」
子「、、、、」
父「死ぬ気でやれ！」

話は前後して、その年の夏頃か、もう少し後の秋ごろか、まだワタナベが商社を退社する以前の段階で、小宮山が作曲を始める。

「ワタナベ君の影響で1曲作ったよ」との連絡を受け、小宮山の家に集合した。そして、デモ・テープ制作を二人で行う。

ワタナベが1人で完成させたデモ・テープを持参し、ただ聴かせていた頃とは違い、今回は最初から二人でデモを制作した。そのことがさらに二人をぐっと近づけた。

最初の共同デモ制作は『join the fluety gloovy club』という初々しい曲。この時初めて、他人の作った曲にあれこれギター・フレーズやコーラスなどの肉付けをしていくという楽しみを知る。ある意味、自分の曲が出来た時以上の喜びを感じる。

すぐに『メリーゴーランド』という曲も誕生し、土日だけでは時間が足りず、会社帰りに原宿・小宮山家で作業、なんて日も頻発しつつあった。かせきさいだぁのレコーディングも始まり、ぐちゃぐちゃな日々。あまりに毎日同じスーツのまま家にも帰れない日が続き、何を思ったのか、明らかに体のサイズの違う小宮山のジャケットを借りて会社通いしていた時期もあった。誰が見てもダブダブ！まるで昭和初期の漫才師！かなり危ないビジュアルで東京や横浜の街をうろついていたわけであるが、他人の視線になんか気づきもしないくらいに充実していた。毎日が楽しくて仕方がなかった！

そんなダブダブ姿で会社に通っていたある日のこと。仕事を終え、鶴見駅から自宅に帰るのためのバス料金をチャリンと入れたその瞬間、空から曲が降って来た。これこそ本当に「降って来た」というヤツ！イントロからメロディも歌詞も全部。サビも続いて出てくる。さすがにこんなことは生まれて初めてだった。どこかで聴いた既存の曲ではなく、明らかに自分の作品だった。

それは『呼吸をしよう』という新曲で、最終的に発表されたバージョンでは1番と2番の歌詞を入れ替えてあるが、ほとんど曲の所要時間と同じタイムで作曲が完結した。いや、作曲したとすら言えない、頭の中に流れて聴こえた曲をキャッチしただけだった。それくらい高揚していた時期だったのであろう。歌の内容が当時の心情そのままである。

この曲が今までとどう違ったかという、頭の中に聞こえて来たイメージが明らかにピアノメインのサウンドであった事。それは即ち、小宮山とのホフディランを見据えて生まれてきた最初の曲であることを意味していた。

せっかく会社の仕事を終え、疲れて帰宅したのに、そのまま小宮山に連絡を入れ、クルマに乗って原宿まで向かい、スケッチ録音のテープすらない、ついさっき出来たばかりの歌詞のメモと脳内サウンドの記憶だけを頼りに、2人でデモ・テープ制作を開始。もちろんピアノがメイン楽器だ。小宮山発案の3拍子のキーボード・ソロを取り入れな

がら、猛スピードでキラキラでピッカピカのデモ音源が完成した。『join the fluety groovy club』『メリーゴーランド』そして『呼吸をしよう』。この3曲で何かを掴んだ！決定的なパートナーシップが生まれた！この日に本当の意味でバンドになった！

その後、小宮山もますます曲を増やし、二人でのデモ・レコーディング作業も回数を増していく。ポニー・キャニオンはまだ「ホフディラン＝ワタナベイビー楽曲」という認識であり、バンドもまだ小宮山曲をライブで演奏するまでに至っていない事もあり、とりあえず目の前にある小宮山作品を『ユウヒビール』というアルバムにして発表する、という構想が持ち上がる。

かせきさいだぁのアルバム制作ですでに関わりを持っていたナチュラル・ファウンデーションが『ユウヒビール』のリリースに興味を示してくれた。しかし、小宮山は4月からアロハ・プロダクション、そしてポニー・キャニオンとの契約が内定している身である。業界内への宣伝、根回しが派手に展開され始めている新人バンドのメンバーが、別レーベルから別名義でアルバムをリリースするなどという暴挙が普通は許されるはずもない。

ところが、もはや何度目か数えるのも困難となった幸運の女神がまたまたホフディランに微笑む。3月までに録音作業を終え、契約期間開始とともにホフディランの活動に専念することを条件に、ユウヒビールのアルバム制作の許可が下りたのだ。ワタナベに続き小宮山もつづく運の良いミュージシャンである。よくもまあそんな好き勝手を許可してくれたものである。現在になって、当時の事務所・レコード会社の寛容さに驚くばかりだが、業界の常識で考えたら、当時でも今でも、キャリアの最初の最初からこんなにワガママにやらせてもらえる例は極めて少ない。

最終的にはワタナベの参加まで認められ、同じメンバーで2つのグループをCDデビューさせるといふ、極めて特異な年を迎えることとなる。



デビュー前コンベンション・ツアー

会社に通いながらの音楽生活は辛くもあったが、爽り多き時期であった。年が明けてそんなスーツ生活もあと残り数ヶ月となった96年1月から、アルバム『ユウヒビール』とホフディランのメジャー・デビューに向けてのレコーディングが並行してスタートした。

レコーディング・アーティストとしてのホフディランのキャリアは、あの空から降って来た『呼吸をしよう』からスタートした。同曲がテレビ番組『ボンキッキ』で使用されることが決定し(いきなりのビッグ・タイアップ!)、それに合わせてのデビューを見据えたレコーディングだった。

当初、ホフディランは『呼吸をしよう』で96年4月にメジャー・デビューすることになっていたのだ。その時、この曲でデビューしていたら一体どんな未来だったのだろうか？20年以上続いていたのだろうか。

アルバム『ユウヒビール』のレコーディングは学芸大学のリンキーデックという小さなスタジオで行われ、平日の午後から夜中まで、小宮山は狭いプロデューサーズ・チェアに座りっぱなし。夕方からはワタナベもそこに加わり、正ギタリスト、堀内順也の座る場所すらない状況で行われていた。一方ホフディランのレコーディングは赤坂だの銀座だのの豪華スタジオで、週末を使って広々と優雅に行われた。同じメンバーで並行して作業していてもスタジオの雰囲気は随分違った。ユウヒーズっぽさとホフディランっぽさが区別され、その違いも楽しんだ。どちらのスタジオにもそれぞれの良さがあり、凄いスピードでレコーディングという作業に慣れていった日々。

そんなある日、新聞の片隅に『こち亀』ついにアニメ化！という記事を見かけたことがあった。厳密に言えば、「ついにアニメ化か？」という憶測記事であったのだが、なんとなく目に止まった。そんなにこち亀ファンであったわけではないが、なんとなく「よせばいいのに」と思った記憶がある。ずっと昔から、それこそ物心ついた時から病院の待合室などの漫画雑誌で『こち亀』を見かけてはいた。『BLACK JACK』とか『ドカベン』クラスの大物作品であることは子供心にわかっていた。それなのに、一向にテレビ・アニメ化されないところに魅力を感じていた。のちに聞いたところによると、案の定アニメ化の打診は何度もあったが、作者の秋本先生が頑なに断っていたとのこと、よく知りもしないのに、そんな「気骨」のようなものを感じていた。だから「よせばいいのに」と、なんとなく思ったのだが、大きなお世話である。

それからしばらくして、そんな新聞記事のことも忘れていたある日、ポニーキャニオンからホフディランの二人に呼び出しがかかった。緊急会議である。

すでに存在していた『スマイル』という楽曲で「『こち亀』が取れそうだ！」との報告を受ける。つまり「こち亀タイアップの『スマイル』デビューで行きたいので、ボンキッキの件は一旦白紙にさせてもらって良いか？」という打診である。断る理由はなかった。ビッグ・タイアップを上回るグレート・タイアップ！

個人的には、子供の頃にボンキッキの音楽には相当な影響を受けていたので、思い入れはあったのだが、それでも今回の事の重大さは十分にわかっていた。デビューを『ボンキッキ』か『こち亀』かで悩むという、贅沢すぎる究極の選択であったのだが、決断はすぐだった。メンバー・スタッフ全員の意思が一致した。

これを持ってホフディランは、『スマイル』というシングル曲で7月にデビューする、ということが正式に決定した。

「よせばいいのに」どころではない。世間的にも大ニュースとなっていた『こち亀のアニメ化』が我が身に降りかかったのだ。その威力は絶大で、デ

ビュー数ヶ月前にしてラジオやインスタライブなどのキャンペーン仕事がどんどん入り始める。



出版社など挨拶ツアー

春の時点でほとんどの主要都市にはすでに何度も足を運んだ。

全国のキャニオン営業所挨拶ツアー、翌週には全国レコード店挨拶ツアー。翌週はラジオ局・地方紙編集部ツアー。次の週はインスタ・ライブ・ツアー。毎週、毎日違う都市にいた。



全国レコード店挨拶ツアー

特にインスタ・ライブ・ツアーは二人でのステージングというものを掴む上で、大きな収穫の場となった。それまでステージでは演奏に専念していた小宮山が抜群のステージング能力を発揮し、ワタナベの魅力押し出した。ワタナベも小宮山の能力を信頼し、大船に乗ってリラックスしてライブを楽しんだ。

演奏は下手だったが、無敵だった。誰にも負けなと思ってた！

朝から晩までマネージャー木村、アー担吉村（現ポニーキャニオン社長）とともに狭いタクシーに押し込められながらラジオ局からインスタ・ライブ会場へ。またタクシーで雑誌社へ、またまた夕方の部のインスタ・ライブ会場へ。そしてその夜のうちに次の都市へ。ホテルに入る前に深夜放送を一本、。こんな生活だった。

96年の春のことは今でもよく思い出す。極めて短期間の間に多くの経験をした。契約開始とともに



左上) ごく初期のラジオ・キャンペーン 右上) 『スマイル』デビューキャンペーン・ツアー 左下) ツアー先新幹線移動(ファン撮影) 右下) スペース・シャワーTV『渋谷派パンチ』出演時

いきなりの過密スケジュールでヘトヘトではあったが、それでも間違いなく人生で最高の春だった。まだデビューシングルさえ出でおらず、地位も名声もない謎の新人であったが、不思議なことに、ホフディランはどこへ行っても歓迎された。無関心な対応や、適当にあしらわれるような経験はほとんどなかったように記憶する。今でも春になると、『スマイル』のイントロの音色とともに、あのワクワクするような気持ちが蘇ってくる。

振り返ってみれば、音楽業界のしきたり全てに反逆し、大人たちを小バカにしたような態度を取り、揚げ足を取り、ラジオの生放送でオナラをし、インタビューでは全部嘘の答えだけをしたこともあった。失うものがないからといって、今思い出すだけでもヒヤヒヤするような言動も随分あった。小宮山とワタナベを間違えたままインタビューしてきたライターさんに対し、ずっとワタナベのふりをして小宮山が答え続けた取材もあった。

そんなホフディランであったが、関わってくれた全ての人たちの愛情を背に、1996年7月3日に『スマイル』という曲でメジャー・デビューを果たしたのであった。めでたしめでたし。



あとがき

こうして振り返ると、運にもチャンスにも恵まれてきました。人にも恵まれたと思います。

「なんで自分だけこんなに辛い人生なんだ！」なんて悩み苦しんだつもりでいましたが、よくよく考えてみると、人一倍楽しい22年、いや25年、いや、随分楽しい50年を過ごしてきたんじゃないか！と実感しています。

甘たれるなワタナベイベー！皆様の応援があることを忘れるな！愛してくれた皆様のことを絶対に忘れるな！

この幸せを謙虚に噛み締め、50歳以降の人生をしっかりと生きていくことを誓うワタナベイベーであります。こんな私を支えてくださった皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。

2018年 ワタナベイベー

ホフディラン企画 『ワタナベイベー生誕50周年記念 ライブ ~史上初! 50歳のベイベー誕生~』

- 開催日** 2018年10月17日(水)
- 日時** Open 18:00 / Start 18:30
- 場所** 浅草公会堂
- 出演** ホフディラン
- Guest: いたうせいこう / 竹中直人 / 千原ジュニア / ナイツ / 仲井戸“CHABO”麗市 / みうらじゅん
- チケット** VIP席: ¥8,000
全席指定: ¥5,000
*3歳以上チケット必要

**チケットぴあ、ローソンチケット、イープラス
にてチケット絶賛販売中!**

特設サイトではパースデーライブ詳細やお友達ミュージシャンからのお祝いコメント動画を掲載中! その他ホフディランの最新情報は hoff.jp をチェック!